

春彼岸追悼回向文

敬つて真言教主大日如来 西部界会 諸尊聖衆こと殊に総じては
安養寺本尊薬師如来、当観音堂本尊観世音菩薩に白して言さく。
本日は春彼岸の中日を迎えるに当り恭しく追悼の彼岸会をここ
に奉修し、安養寺檀信徒のご先祖の霊を弔い供養の嚴儀を執り行
う。

「春彼岸菩提の種を蒔く日かな」と古人は詠んでまた一方 暑さ
寒さも彼岸まで」と季節の百八十度の展開、自然界の移り変わり
を適格に云い当て文芸に表現している。今年の冬はすさまじい寒波
に襲われ、疾風厳しく肌を刺す日々が続くも、ようやく霞み棚引く
春うららの暖日を迎え身も心も弾む陽春を楽しめる。

さて冒頭の「菩提の種を蒔く」との句になるが、これは煩惱を断じ
て、心に仏のみ教えを育てていこうとの意味なり。彼岸の日を機縁
としてみ仏の教えをわが身に植えつけ、仏の境地を戴こうとわが身の
再発見なり。申すまでもなく彼岸とは、此の岸に対して彼の岸をい
う。苦悩に喘ぐあえこの世、娑婆世界の此岸を離れ安養のみ仏の世界
へとこの私の心を移して自覚をもたらす行動なり。激しく燃える煩
悩の火が鎮まり、吹き荒れる嵐が収まって静かに安定した心定めが
でき上るとゆるぎない居場所が開ける。即ち彼岸の岸にたどりつく
素直に墓前に額衝ねかずき、父母、兄弟姉妹、伴侶から先祖の霊みたまに思
いを興すことができる。そして安養寺観音堂に詣でて本尊ご宝前に
おいて朗々とした読経とご詠歌和讃に耳を傾け、み仏の声を全身に
戴くとおのずから信心への呼び声、み仏のお慈悲が伝わり、仏と私

の交わり感応道交たえの妙なる融合が得られるものなり。

私ども全て仏の子、仏弟子なり。み仏から常に次の五つの行いができているかご照覧されている。

一つ至きているものの命を奪っていないか」。

二つ盗みをしていないか」。

三つ邪まな愛欲を犯していないか」。

四つ偽りごとを云っていないか」。

五つ施しをしているか」。

東に傾いている木は、いつ倒れても必ず東に倒れる。同様に日頃の平生へんざいにみ仏の教え仏法に耳を傾けている者はいつどんな死に方をしても必ず仏の国に生まれると、説かれている。

されど私どもの日常生活をかえりみると、宗教的な罪惡を犯さねば一日として生きていかれぬ。殺すべからず、殺さしむなかれのこの至上命令も、生きものの命を断たなければ生きていけぬ。私が生きることは、こうゆうぬきさしならぬ「業ごう」を背負っている。これには心から懺悔し、生かされて生きていくほかない。その報恩行がまさしく仏弟子の正念場なり。

さてここに安養寺熊谷俊亮住職は、この彼岸会を終えるや二日後には弘法大師四国八十八ヶ所霊場へと修行に出発す。四十年近く一回も欠かさず安養寺の年中行事として継続。その心のうちは弘法大師への報恩の行であり、至たかされて生きている「自からへの懺悔の行だ、という。南無大師遍照金剛」を唱え、お大師さまみ

仏さまに一身を投げ打っておのが住職としての心定めほかに他ならぬとお

聞きした。

無明の暗闇が一念の懺悔からパッと破れて誠の信心の重さと仏智の不思議を得て光明に至ることも体験されているに違いない。

来年一月には最愛の直子寺族夫人の七廻忌の宿忌を控えて、これまで安養寺檀信徒への教化育成の活動へ夫婦して血のにじむ苦勞を重ねてこられた軌跡を偲びつつ、新たに信仰の道場安養寺法城ともしびへの灯が益々照り輝やかんことを希求するものなり。

阿耨多羅三藐三菩提

このうえは本日ご参詣のご尊台各位の健康増進、家門の繁栄、子孫長久を祈念し奉る。

乃至法界 平等利益

平成二十八年三月二十日

京都府向日市寺戸町

亀光庵住職

土口哲光敬白